

ケヤダイオウノミヤ 氣屋大王宮 鳳至郡内保に在つた。式内等舊社記に、『氣屋神社。櫛比庄内氣屋村鎮座。稱『氣屋大王宮。或云『氣屋大權現。或稱『大王權現。舊社也。』と記し、又能登名跡志には、『内保村とあり。散村に毛屋といふ所あり。氣屋大王權現あり。此の御神天竺摩伽陀國より我が朝丹波國に飛來り給ふ御神なりしに、瑩山和尚の瑞德によつて、此所へ跡を垂れ給ふ。云々。總持寺より五俵宛扶持有て、今も宮の裁許する也。總持寺鎮守の宮也。』とある。今太玉神社といふものであらう。

ケヤタウゲ 氣屋峠 河北郡氣屋から種部落に越える峠。高さ一〇六米。

ケヤヒメジンジャ 氣屋姫神社 河北郡氣屋に鎮座する。式内等舊社記に、『氣屋姫神社。英太郷氣屋村鎮座。稱『氣屋姫宮。舊傳云。白山之御子神也。』とある。今は白山社と稱する。

ゲンウカン 元雲館 ↓ソウユウカン 壯猶館。

ケンエモン 劍右衛門 京都の庭師。寛永十一年前田利常が玉泉院丸に假山・懸泉を造らしめた時、招かれてその工事に當つた。監督は大橋又兵衛・瀧長兵衛であつた。

ケンエン 兼縁 ↓レンゴ 速悟。

ケンオンジ 顯遠寺 河北郡高坂に在つて、日蓮宗に屬し、暖乗山と號する。眞言の僧暖乘、日像に歸依して本郡宮野村に建て、寛保中今の地に移つたといふ。

ケンカオツカケモノヤク 喧嘩追掛物役 寛文四年足輕頭坂井與右衛門直往・杉浦仁右衛門守成が初めて之に任せられた。兩人の内

にて一番出二番出を定めて置き、一ヶ月代りに申合せて一番出の者は在宿し、又登城の時も乗馬で詰番の足輕四五人を召連れたといふ。元禄以後は御先手物頭の中から二人宛一年代りに勤め、以來連綿した。この役の起原は、阿部九郎右衛門・田邊彌五作が寛文四年十月十六日闘争をなした爲で、諸士等凡べて帶刀の者の喧嘩をなした時、馳せて之に赴き、制止鎮定するを任とした。初期には喧嘩奉行とも書いてある。

ケンカク 賢覺 能美郡小松長圓寺の開基で、初め台密の徒であつたが、蓮如に歸依して了珍坊賢覺といふた。明應二年八月廿八日淨泉と共に六字の釋義を質問して與へられた消息は、帖外御文八十に載せられてある。又天正八年の蓮如物語には、『明應八年三月九日には御亭の面へ出御ありて、法敬坊空善・加州小松の了珍等を召て、久しきなじみなれば、妾をも見せまゐらせたく存せんと仰られ、種々忝き仰ども暫く御法嘆ありき。』とも見えてる。

ケンカブギヨウ 喧嘩奉行 ↓ケンカオツカケモノヤク 喧嘩追掛物役。

ケンガミネ 劍ヶ峰 白山御前岳の東北に屹立する山で、白山記には劍の御山といひ、又劍の山とも劍が嶽ともいふ。高さ二六六〇米、地質角閃安山岩。此の峰に神祠はないが、石川郡鶴來の金劍宮は、白山第一の御子神で、この神靈を祀つたのであらう。白山遊記にいふ、『劍峰乃美禪者三峰屹立。嶽不可攀。巖石成山。上層戴砂磔。云々。天文廿三年五月峰南開火口噴石。雨來漸々崩壞。五峰終作三峰。』と。

ケンキイン 幻奇院 加賀藩主第十代前田重政の男で早世した某の法號。

ケンギヨウオロシ 檢校卸 ↓オロシサク 卸作。

ゲンキヨウシユウ 言誑集 一冊。大規模元の失脚以後、世人時事を諷して落首を作るもの多かつたが、老臣前田直躬は後に之を集めて言誑集と題した。本書の末には直躬が觀察する所の大規模元の爲人を簡短に記してある。

ゲンギンオハラヒマイ 現銀御拂米 藩政の時、山地の村方で租米を有せざる時は、御算用場に對して拂米を請ふことがあつた。この場合には、時價の七分乃至八分を上懸銀とし、米穀の切手を得て納税に當て、翌月その地の平均價格公定せられるを待ち、之に一石一匁を加へて、拂米代銀の殘額を仕拂はしめる。之を現銀御拂米と稱した。若し上懸銀の殘額を翌年三月又は五六月に至つて仕拂はんとする時は、前の公定相場よりも一石三匁を加へる。之を延拂米といふた。

ゲントウイン 幻空院 加賀藩主第六代前田吉徳の子保姫の法號。詳しくは幻空院電光智照禪童女。

ケンゲン 兼玄 ↓レンキヨウ 速慶。

ケンコウ 兼興 ↓ジツキヨウ 實教。

ケンコウイン 顯光院 加賀藩主第十四代前田慶寧夫人鷹司氏の法號。詳しくは顯光院洪倫惡範大姉。

ゲンコウイン 源光院 加賀藩主第五代前田綱紀の子節姫、即ち淺野吉長夫人の法號。詳しくは源光院正臺惠覺大姉。

つて、淨土宗に屬する。山號は護念山。承應元年根譽源政之を創立し、大正二年野田寺町永福寺を合併した。

ゲンコウシヤクシヨ 元亨釋書 元亨釋書入藏慶讚偈頌及び雲州安國寺通玄の肉書なるその跋各一卷は、石川郡松任本誓寺の所藏である。通玄の跋は本朝高僧傳にも載せられるが、文字に一二の相違があり、且つその述作の永和四年七月廿三日に成つたことは、唯この肉書にのみよつて知り得られる。抑元亨釋書編纂以後の事情は、現存重刊の同書首尾の文に就いて略之を窺ふことを得べく、この慶讚偈頌の跋によつて更に詳悉し得られる。蓋し元亨二年東福寺の虎關師鍊が釋書選述の功を竣るや、八月後醍醐天皇に上表して、大藏經に入れられんことを請うて顧みられなかつたが、延文三年六月萬壽寺の龍泉令卒の更に後光嚴院に上表するに及んで裁可を得た。是に於いて同年令卒の高足たる海藏院の住侶單況は、諸山領徳の慶讚偈頌五十三首を得て獅子筋の一卷とし、貞治三年正月紫縁を穿つて釋書を上梓し、次いで永和四年獅子筋の跋を一峰通玄に求めたのである。是を以てこの巻はもと海藏院の所藏であつたのである。

ケンコウヨク 越登賀三州志。

ケンコウヨク 越登賀三州志。餘考者證目錄 一冊。森田平次編。富田景周著の越登賀三州志のうち鞆餘考の内容を簡單に檢索する爲に編纂したもので、神社部・佛閣部・古墳部・加賀地名部・能登地名部・越中地名部・加賀土着人部・來客領主等部・國君等部・諸士部・雜部に分類し、更に三州志撰述の